

小さくなるだけちいさくなって木椅子あり波民村尋
常小学校 冬 奥田亡羊

上句の工夫に注目。啄木記念館そばにある木造二階建ての小学校の教室である。明治期の小学生は本当にこんなに小さかったか、と疑いたくなるほど小さな机と椅子が並んでいる。夏の全国大会のオプシオン参加者は、この教室を訪ねることができるらしい。

絶えず触觉を伸ばし引き込めこの街は大空の下ピクピクと生く 岡田恵美子

都市を見る意外な見方に感心した。建築の専門家の目ならではである。たしかにコマ送りの映像で見れば、ビルが建ったり壊されたり、十年二十年五十年の間に、触觉を伸ばしたり引つ込めたりという感じである。

影さして飛びてゆきたる小鳥らの声が峠を越えて聞こゆる 水本光

ゆったりと伸びやかな雰囲気がいい。目と耳で楽しむ小鳥だが、動きに興味の中心がある点が特色。へみやまいで夜半にや来つるほととぎす眺かけて声のきこゆる平兼盛等、鳥の移動をうたう歌は多くある。

折畳み傘を畳むようにフランミンゴは水を飛ばして片足しまう 水口良子

「水を飛ばして」まで読んで、エツと違って注目した。形の上だけの連想ではなく、しずくを飛ばすという状態

短歌の現在

No.368 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

の連想を重ねている点、手の込んだ比喩である。

松の風にわれは近づく 巖かに刻の風化の匂える彫像 住正代

「松の風にわれは近づく」は、「風に―押されて」「風に―逆らって」等が省略されたかたち。ここが第三句の「巖かに」とうまくひびきあっている。「歌壇」二月号掲載の「近江をうたう」の小旅行の折の作らしい。

点訳室に冬の静かな時流れこのひととせの終らむとする 大塚伸宏

点訳室は、図書館あるいは市や町など公共施設の一室だろう。こういう場所で過ごす大晦日の過ごし方もあるのだと知って感心した。上句、点字を打つ音が聞こえているからこそ「静かな時」なのである。へしづかさや岩にしみ入る蝉の声と同じ原理だ。

「医学馬」が集まる書架の島、学術雑誌は交雑をせず 大塚泰子

表現が確でいい。なかなかの佳作と読んだ。学術雑誌は何年何十年も同じ表紙・判型で、他の雑誌と混ざったりすることなく、整然と並んでいるというのである。アイウエオ順で並ぶ図書館の書架、「い」「う」が一旦とまりの島になっているのだ。作者は図書館の司書を仕事にしているのか。

彩られたる駅前のもみの木は雪の気配をまよふしば